

私の出会った人

(その九)

関谷啓子

数年前から高齢の方のお話相手をさせてもらっている。

お一人お一人に人生があるように、お聞きする話は実に多彩だ。

今回は多分80歳を超えておられる女性の方。

小ぎれいな身だしなみ、知的なイメージがする車椅子を使用しておられる。

初めてお目にかかったのだが、ピカピカのお肌が光っている。

「うわあ～白くてキメが細かくて綺麗なお肌ですね～」と声かけするとこわばっていた表情が和らいで「ずっと米ぬかで洗っているのですよ。母に教えられたとおりにね」との返事。そこからスルスルと言葉がほぐれて、妹さんやお母さんの話、若い頃洋裁や和裁を教えていた話・・・が続いた。しばらく話すと「若い頃は証券会社で男性と同じように働いていた。あの頃は生き生きとして楽しかった」と。思いなしか声までツヤが出て勢いがある。半時間ほどお話を聞いて退室した。

お聞きしてしばらくすると、彼女に初期の認知症の症状が出ているのに気づいたが、本来かなり知的に高い方であったのではないかと思われる。服装も色白白髪 of 彼女によく似合いインナーに黒を着ておられるのがかなりのセンスだと思った。話の最中、姿勢を崩されることもなく、ゆっくりと言葉を選んで話そうと勤めておられるのがわかった。

妹さんに認知症の症状が出ていることを気に病んでおられ続けて「私も・・・」と沈黙になられたのが心に残った。本人さんの不安をどのように受け止めて返したらいいのかわからず一緒にいることしかできなかった。

ご自身の「こうありたい。こう見られたい」というイメージを大切に持っておられ、生活の場所が変わってもそれを守ろうとしておられる姿勢を強く感じた。

お話が終わり、部屋のドアを閉めるときに視線があったので会釈したが、全

く反応が無かった。まるで私がそこにはいないかのような視線だったのに驚いた。
視力が弱っておられるのか？そうでなければ最後の「人に来てもらうのは大好き、話をするのは大好き。いつでも毎日でも来てね」との言葉と釣り合わないのは何故か・・・と帰宅してもずっと気になっていたのだが、落ち着いてよく考えると、あれは彼女の自然なというか正直な気持ちの表れだったのだろう。話し相手になってもらっていたのは私だった！

